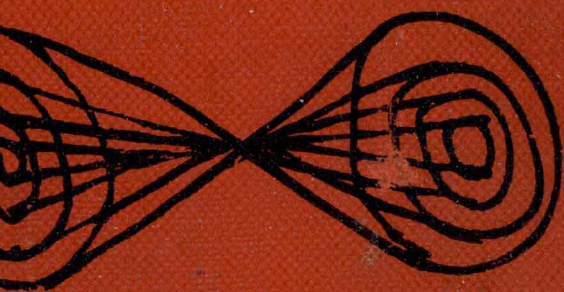


フオークナ ヘミングウェイ

世界文學大系

61



フ ォ ー ク ナ ー

死の床に横たわりて
パイロン ミシシッピー

ヘ ミ ン グ ウ ェ イ

武 器 よ さ ら ば

佐伯彰一・大橋健三郎

西川正身・石 一郎 訳

世 界 文 学 大 系

61

筑 摩 書 房 版

世界文学大系 61

フォークナー
ヘミングウェイ

昭和34年4月10日発行

定価 450 円

編 者 西 川 正 身

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(29)局 7651

目次

フオークナー

死の床に横たわりて

パイロン

ミシシッピ

ヘミングウェイ

武器よさらば

フオークナーもしくは神学的転位

ヘミングウェイもしくは瞬間の昂揚

解説

年譜

佐伯彰一訳

大橋健三郎訳

西川正身訳

石一郎訳

C・E・マニ
篠田一士訳

C・E・マニ
中村真一郎訳

佐伯彰一

257 95 5

279

436

448

457

466

裝
幀
庫
田
綴

フ
ォ
ー
ク
ナ
ー

もいつている。そこで、こんなに何羽も取られてしまうと、もう卵をうちで食べるわけにはゆかなくなつた。何しろお前がいい出して、飼うことにしたんだからって、うちの人に叱られるのは、いやだからね。で、ローリングトンさんから、ケーキの話を聞いた時にゃあ、一つ自分でケーキを焼いて、いつときに、鶏の二羽分の掛け値なしの代金を儲けようじゃないかと、考えた。それに、一時に卵を一つずつ貯めてゆけば、卵代だつてただになつてしまふ。ところが、

今週は、具合よく生んでくれたんで、売れる約束の分以上に、ケーキを焼く分までちゃんと浮いてきたばかりじゃない。小麦粉も、砂糖も、薪代もすっかり浮いて出るぐらいに、卵がたまつた。そこで、昨日、ケーキを焼いた、またとないくらいに念入りにやって、申分ないケーキが焼き上つた。ところが、けさ、町へ出かけてみると、ローリングトンさんのいうには、奥さまの気が變つて、結局バーティはやらすじまい、という話じゃないか。

「なにしろ、ケーキは引きとつてもらうんよ」
ってケーティはいう。

「でも、向うのほうでも、もうケーキにゃあ、用がねえもの」って、私がいうと、「引きとつてもらわにゃあ。もつとも、町の金持の奥様は氣が變つても、それでとおるし、貧乏人はそういかなえんだから」とケーティがいった。

お金なんて、神様からごらんになりや、何でもねえ。神様は心の中まで見とおしだもの。

「ひよつとしたら土曜のバザーで売れるかもしれねえ」って私あいつた。ほんとにうまく焼けるんだからね。

「一個、二ドルにもならないわよ」ってケーティ。「でもまあ、元手なんてかかつていねえみたいなんもんだし」なにしろ、自分で貯めた卵で、砂糖や小麦粉も卵十いくつと取つたええもんだし。ケーキの元手なんてかかつていねえみたいなんもんで、うちの人も判つてるとおり、売れるつもりの方は十分とつて、浮いて出た卵だし、いってみりや、どこかで見つけたか、よそから貰いもの同然の卵だしね。

「なにしろ、せんに約束したも同然なんだから、引きとつてもらうんよ」ってケーティはいつて。でも、神様には、心の中まで見とおしだ。正直つてことを守らぬ人間が世の中にいるのも神様の御心なら、その御心を疑ぐるなんて、私のするこつちやねえ。

「向うのほうでも、もうケーキには用があるめえ」って、私はいった。ほんとにうまく焼けたんだがね。

この暑いのに、アディときたら、掛蒲団を顎のときまで引つかぶつて、外に出してるのは、両手と顔だけ。枕を背中にあてて、窓から外が見えるように顔を起しているし、キャッシュニが手斧や鋸をもつたびに、ここまで音が聞えてくる。もし、こつちがつんぼでも、アディの顔だけじつと見ていりや、キャッシュニの姿や削つてる音がちゃんと判るかも知れん。アディの顔は

やつれてしまつて、骨のあるのがすぐ皮膚の下に白い筋になつて判る。眼ときたら、二本の蠟燭の火みたいで、それも鉄の燭台に蠟がとけて垂れ下つてくる時みたいに見える。それなのに、永遠の安らぎ、永劫の救いと恩寵の気配はまだ見られない。

「こんどのケーキはほんとにうまく焼けたけど、でも、アディの焼きつぷりにゃあ及ばねえ」そう私はいう。枕おおいを見ると、あの子の洗濯やアイロンのかけつぷりが一目で判る。アイロンかけた、なんでもんじやねえ。賢いアディにも、わが子のことだけは判らんのか知らん。アディも、いまじゃ四人の男の子と、一人のお転婆娘の世話にすがつてやつと生きてるだけ。

「ケーキにかけちゃ、この界限にもアディに及ぶ女はいねえ。アディが起き出して、またケーキ作り出したら、こつちの売行きなんか、上がつたりだわな」って、私はいう。掛蒲団の下のアディときたら、まるでレールみたいな細さで、敷蒲団に入つてる玉蜀黍の皮のぎしぎしいう音で、やつとまだ息をしてると判る始末。あの子がぐつと屈みこんで、うちわであおいでいるのに、アディの頬に垂れた髪の毛も、動きさえせん。こつちが見てるあいだは、あの娘もうちわを次々と持ちかえて、休まない。

「眠つてるの？」ケーティが小声でいう。「キャッシュニのほう、見てるんよ」あの子はい。鋸の板を切る音が聞える。まるで、いびきみたいだ。あの娘はトランクに腰かけ、ふり向

いて窓の外を見ている。この娘の頭飾りは、赤い帽子とほんとによくうつる。たった二十五セントの代物なんて、思う人はあるまい。

「ケーキは引きとつてもらうんよ」ケーキはいう。

ケーキが売れてくれりや、いくらも金の使い途はあつたらう。でも、焼き賃の外には、何一つ元手もかかつてねえみたいなものだし。まったくの話、誰にだって、やり損いってものはあるんじやが、損もせずに切り抜けるってわけにはなかなかいくもんじやねえ。ケーキならこっちの腹へおさめておきや、それですむんじや、よっぽど運がいいほうじや。

広間から誰かが来る。ダールだ。前を通る時も、のぞきもしない。そのまま行つてしまつて、また裏口のほうへ見えなくなつてしまつまで、あの娘がじつと見てる。あの娘の手があがつて、頭飾りのビーズ玉にそつとさわり、それから髪にさわる。こつちがじつと見てるのに気がつく、と、あの娘は、ぼかんとした眼付になつてしまふ。

注一 アディの娘、デューイ・デルをさす。

ダール

親父とヴァーノンが、裏手のポーチに坐つて

る。親父は煙草入れをかしげて、親指ともう一つ指で、下唇をぐつと引っぱつといて、その上へじかに噛み煙草を落しこんでる。俺がポーチを通じて、バケツの中へ瓢箪を突つこんで、水を飲むあいだ、二人ともあたりを見廻してゐる。

「ジュエルはどこだ？」親父がきく。杉の木のパケツにいつ時いれとくと、ぐつと水の味があがる。舌ざわりがあつたのは、まだ子供のころだつた。舌ざわりがあつたかいようで、すうとつする。杉の木に吹く、暑い七月の風の匂いみたいな、かすかな味がする。せめて六時間はいれといひ、瓢箪から飲むんではないと、味が出ん。水は金物から飲むもんじやない。

夜分になると、もつとまくなる。俺はいつも広間の床に、じかに毛布を敷いて寝てたんだが、皆が寝静まるのを待つてから、よく起き出してバケツの水を飲みにつけた。あたりもまつくら棚もまつくらで、静かな水面が無の中にぼつかりとあいた丸い穴みたいで、俺が柄杓を突つこんで水の眠りをさます前には、バケツに星が一つか二つ、口をつける前の柄杓にも星が一つか二つ、見ええた。あれから、俺も大きくなつた、年をとつた。で、こんどは、みんなが寝静まるのを待つて、みんなの寝息をきいてからシャツの裾をたくし上げ、手では触らずとも自分のからだのはつきり判り、ひんやり涼しい静けさが、俺のおちんちんに吹きつけるのを感じては、キャッシュも、向うの暗がりと同じことをやつてゐるんじやないか、ひよつとしたら、俺がこん

な気になったり、やり出したりする二年も前からやつてたんじやないかつて思つたもんだつた。

親父の足は指が折れて、ねじ曲つて、ちぢかんで、小さい足指には爪も丸つきりなくて、ひどく不恰好になつてゐる。小さい時に手製の靴をはいて、湿地で働きづめにしたせいだ。いま、椅子のわきに、親父の靴がおいてある。刃の鈍つた斧で鉄鉄を叩き切つたみたいな恰好だ。ヴァーノンは町から帰つたところ。町へ出かける時は、仕事着のままじゃぜつたい行かん男だ。女房のせいだつていう噂だ。以前は、お袋とおんなじに先生をしたこともある女だから。

柄杓の残りをぱつと地面に捨ててから、袖口で口を拭く。明日の朝までにや、きつと雨になる。いや、今日、日のあるうちに降り出すかな。「納屋へいつてきた。馬車の支度しといた」俺はいう。

また、あの馬を相手に馬鹿遊びしていやがる。馬の奴、納屋から牧場に出てゆくんだな。もうじきに見えなくなる。ほら、松の苗木のあいだの涼しい木蔭に見える。甲高く一声、ジュエルの奴が口笛をふく。馬が大きく鼻を鳴らす。で、ジュエルが馬を見つめる、青い木の影のあいだに、一瞬きらきらと光る馬の姿。ジュエルがまた口笛をふく。馬は足を突つぱり、耳をさかんに振り立て、左右不揃いの眼をむき立てて、斜面をかけ下りてきて、二十フィート向うに横腹見せて、びつたりと止まり、子猫そっくりの素ばしつこい様子で首をまわして、ジュエルの

ほうを見やるんだ。

「ほら、こっちへきなよ」ジュエルがいう。馬が動き出す。からだをびくびくつとゆすりたて、足をそろえ、舌をめらめら燃える焰（ほ）みたいにならつかせてる。たてがみと尾を振りたて、眼をむき立て、もう一度短い騰躍（とうやく）をやってみせて、また立ちどまり、足をそろえて、じつとジュエルを見ている。ジュエルは両手を腰にあてたまま、ゆつとり馬に近づいてゆく。ジュエルの足を別とすると、日射しの中の馬とジュエルはまるで活人画（かき）むきの動かない姿そのままだ。

ジュエルが馬にさわらんばかりになると、馬は後足で立つて、ジュエル目がけて、さつと躍りかかる。きらきら光って入り乱れる蹄（ひづめ）が、まるで翼（よく）みたいにジュエルをつつみこむ。蹄を光らせ、ぐつと胸をそらせた馬のからだは蛇のようになしなやかさで閃（きら）くように動く。ジュエルの両腕（うで）がびくつと動くかに見える寸前に、彼のからだ全部が地面から離れて、蛇のしなやかさで横さまにぐつと動き、馬の鼻面に触れるや、また地面にもどる。と、両者は、じつと硬く、身じろぎもしなくなる。馬は硬ばり震える足で、頭を垂れたまま、からだを突っぱるるように後へ引き、ジュエルは、地面もえぐらんばかりに足をふみしめ、片手で馬のあらい息を避け、もういっぽうの手で馬の首に小刻みに、数知れぬやさしい愛撫（あいぶ）をあたえながら、荒っぽいきわどい罵声（ののしり）をあびせている。

奴らは、おそるべき不動の一瞬に立ちすくみ、

馬は身を震わせ、呻（うな）くのだ。と、ジュエルが馬の背にまたがる。打ち振られた鞭（むち）のように、丸くかがめたからだ馬の動きそのままにぐつと中空に浮き上がる。また一瞬、馬は足を踏んばり、頭を垂れたまま立ち止ったかと思うと、どつと駆け出す。彼らは背骨もがくがくしそうな跳躍をかかす。丘を駆けおり、ジュエルは、高々とひるみ、馬の首にびったりとはりつき、堀（ほり）のうしろまでくると、馬はまた小刻みな足どりをくり、足をそろえて立ち止まる。

「さあ、もうたくさんなら、止しにしてもいいぜ」ジュエルはいう。

納屋の中に入ると、馬が立ちどまらぬうちに、ジュエルはさつと地面に滑りおりる。馬が既に入り、ジュエルが後から入る。振り向きもせず、馬が蹴りかかる、蹄が壁にどんとぶつかって、ピストルみたいな音を立てる。ジュエルは馬の腹を蹴り上げる。馬は首を後ろにのけぞらせて、歯をむき出す。ジュエルは拳で馬の顔をなぐつておいて、さつとかいば桶（かき）のほうに進みよって、とび上がる。秣台（まきだい）につかまって、頭を下げ、厩（うま）の上方から、戸口のほうをのぞいて見ている。道には人氣もなく、もうここからでは、キャッシュの鋸（のこぎり）の音さえ聞えない。ジュエルはのび上って、秣を素早く腕（うで）いっぱいにおろして、かいば桶につめこむ。

「食いな」彼はいう。「ちくしょうめ！ 食べるうちに、さつさと片づけな。でぶ野郎のとんちきめ」

ジュエル

あいつが、すぐ窓の下のところについて、あの腐れ箱をぶつ叩いたり、鋸で引いたりしているせいなんだ。あんな近くじゃ、どうしてもお袋の目に入らんわけにいかんじゃねえか。お袋が息をするたびに、叩いたり、削ったりしてるのが、がんがんと響いて、あいつが、ほら、立派なやつを作って上げてるんだといつてるところまで、はつきり見えるんだ。どこかよそへ移れて、いつてやった。冗談（冗談）じゃねえや、お袋を、早くそんなかに入れてえのかって、いつてやった。奴がまだ小さい時、お袋が、肥料さえあれば、花を植えたいんだけど、というとき、あいつパン鍋（ぱんか）を持っていつて、納屋から馬糞（うまふん）をいつつめこんで帰ってきやがったが、あん時と同じだ。

今日、ほかの奴らも、はげたかみたに坐っている。うちわであおいだりしながら、待っている。こつちもいつてやった。鋸で引いたり、釘を打ちつけたら、眠りもできんぐらにやるのは、止してもらえなかって。お袋の掛蒲団の上に出してる手が、まるで地面から掘り起して、いくら洗ってもどうしてもきれいにならん根っこみたいになつてるといふのに。うちわとデ

「イ・デルの腕が見える。お袋はそつとしといてくれて、いったんだ。切ったり、叩いたり、で、空気がやけにせわしくお袋の顔にあたるので、息もつけんじやないか。あの手斧の畜生め、一と打ちごとに仕上げに近づく。一と打ちごとに。とうとう、通りがかりの連中みんなが立ち止っては眺め、大した腕だっという出す。キャツシュが教会で転げ落ちた時に、俺だけしか居合せなかったら、親父が薪の下敷になつて倒れた時に、俺だけしかいなかったら、こころ中の野郎が一人残らずやってくる、お袋をじろじろ眺めるなんてことにはさせやしなかったぞ。神様ってものがあるんなら、いったい何のための神様なんじゃ。もしかしたら、俺とお袋だけになつて、二人で高い丘の上において、俺が奴ら目がけて、石をころがしてやる、石を拾つては、丘の下の方の奴らの顔や歯やなにか目がけて、投げつけてやる——お袋が静かになつて、あのいまましい手斧の、もう一と打ちもおしまひになる。もう一と打ちで、二人とも静かになれるんだ。

注1 母のアディが信仰のあつた人なのに不幸ばかりふりかかるとをさす。

ダール

奴が角を曲つて、階段を上ってくるのを、じつと見てる。奴はこつちを見ないで「支度はいかい？」って、いう。

「そつちの馬の用意がよければ、な」って俺はいつてやる。「待つてろ」って、俺はいう。奴は親父を見ながら、立ち止まる。ポーチの下の方、穴ぼこの地面に向つて、わざわざもつたいぶつて正確に唾を吐く。親父は膝の上でゆつくり手をこすり合せる。ずつと向うの崖の頂上の先のほうを見つめている。ジュエルは親父をちよつと見まもつて、それから桶のところへ行つて、また水を飲む。

「優柔不断つて奴あ、大きらいなんじゃ」親父はいう。

「つまり三ドル稼げてことだろ」俺はいつてやる。親父のこぶにあたるシャツの部分がかよりも、色が薄くはけてしまつて。親父のシャツには、汗のしみ一つない。一度だつて汗のしみなんかつ付たためしがない。二十二の時に、日向で仕事をして体をこわして、以後ちよつとでも汗をかくと、もう命がないつて親父はいつて。どうやら、自分でも本気でそう思ひこんでるらしい。

「でも、お前が戻ってくるまで、もたなぎや、アディの望みが叶わすじまいになるぜ」と、親父はいう。

ヴァーノン、地面に唾を吐いてる。が、明日の朝までには、雨になりそうだ。

「アディがあてにしとる」親父はいう。「すぐにも出発してもらいたがつとる。そういう女じゃ、あれは。馬はちゃんと用意しとくつて約束したんで、ずつとあてにしてるんじや」

「そうなりや、その三ドルがよいよい入り用つてわけだ」俺はいう。親父は、膝の上で手をこすり合せながら、向うをじつと眺めてる。歯をなくしてから、噛み煙草をふくむと、そのあいだ口が何度もゆつくりとぐつと落ちこむ。無精ひげのせいで、顔の下半分は老いぼれ犬みだに見えろ。「早く決めてほしいな。暗くならぬうちに歩き着いて、荷物がつみこめるように、な」俺はいつてやる。

「お袋、そんなに悪かねえぞ」ジュエルがいう。「余計なことというな、ダール」

「そのとおりさ」とヴァーノンがいう。「今日なんか、ここ四、五日より大分調子もよさそうだ。お前とジュエルが帰ってくるころにや、もう起き直れるくらいになつてさ」

「お前にやあ、判つてるだらうさ」ジュエルがいう。「お袋のようす、しじゅうのぞきに來とるじやねえか。お前、いやお前んとこの家の者みんなでさ」ヴァーノンが彼のほうを見る。ジュエルの眼は、血色のいい顔立の中で、白っぽい木片みだに見えろ。奴は、ほかの兄弟たちより、頭一つ背が高い、以前からずつとそうだった。お袋がいづれもジュエルだけをよけいに折

慥したり、可愛がったりするの、そのためだつて、俺はいったことがある。奴が家にへばりついてるからなんだ、と。それだから、お袋が奴にジュエル(宝石の意)なんて名をつけたんだって、いったことがあつた。

「止さんか、ジュエル」親父はいったが、もうろくに話をきいてもいないふうだ。手をこすり合せながら、遠くを眺めている。

「ヴァーノンの馬を借りる手もあるぜ。そうすりゃあ、俺たちが後から追いつけばいい、もし俺たちの帰る前にお袋に万一のことがあった時には、な」と俺はいう。

「ああ、止める、馬鹿つたらしい口をきくのは」ジュエルがいう。

「自分のうちで、行きたいっていうだろうさ」親父はいう。親父は膝をこすつて。「まったく、いやなこっちゃ」

「あそこで寝ててさ、奴の削つてあるあの馬鹿つたらしい……」とジュエルがいう。とげとげしい荒い口調でいうのだが、その言葉(梧桐のこと)は口に出さない。暗闇に出た子供が元気をふるい立てようと大声をあけて、かえって自分でぎょつとして、急に黙りこんでしまふみたいに。

「うちの車で行きたいのが、アディの望みなんじゃ」親父はいう。「立派なもので、自分のもんだと判つてりゃ、なお安心もできようつてもんだ。アディは、自分のもんが好きな女だつたよ。お前にもよく判つてるだらう」

「じゃ、自分のもんにしといてもいいさ」ジュ

エルはいう。「だがいったい、あれがどうして——」ジュエルは例の色の薄い、鈍い眼をして、親父の頭の後ろのほうを見ている。

「大丈夫とも」ヴァーノンがいう。「あれが仕上がるまでは、きつと命ももつさ。支度が全部仕上がるまでは、いい潮時がくるまでは、大丈夫だとも。それに道路も今みたいなら、町まで連れてゆくのに、手間もかからんて」

「雨になりそうじゃな」親父がいう。「俺あ、運の悪い男でな。いつもそうじゃつた」膝の上で手をこすり合せる。「あの医者の野郎、もうすぐにもきやがるだろうが。あいつに連絡するのがおくてな。明日にでもやってきて、もう長いことない、とアディに言えば、きつと待つのは厭じゃ」とアディに言えば、きつと待つのは厭じゃとかあるうがなかるうが、待つのは厭じゃといひ出すにきまつとる。そうなるともた、取り乱すじゃろうが、そんなことはどうしてもさせとうない。ところが、ジェファソンに家代々の墓があつて、血のつながる連中が待つてゐるんじやから、もう待ち切れんと言ひ出すじゃろう。俺あ、安心させようと思つてちやんと約束してやつたんじや、俺と子供たちで、らばの走れる限りさつと、運んでやるとな」親父は膝の上で手をこすり合はす。「いやなこつちやよ」

「どいつもこいつも、一刻も早くお袋をあそこへ運びこみたがつて、じりじりしてやがる」ジュエルは、とげとげしい猛烈な声でいう。「キ

ヤツシの奴は、すぐ窓の真下で、金槌や鋸がながんいわせとるし——」

「アディの望みなんじやよ」親父がいう。「お前こそ、お袋に何の愛情もやさしさもたん奴じや。全然じや。俺たちは、俺もアディも誰の世話にもなりとうない。今までもそれでやってきた。で、血をわけた者たちが板を切り、釘を打つてくれたと判りゃ、なお安心するつてもんだ。後を濁さぬたちの女じやからな」

「つまり、三ドル稼げつてか」俺はいう。「俺たち、出かけるか、止めるか、どうなんだ？」親父は膝をこすり出す。「明日の晩方には、帰つてくるさ」

「そうじゃな……」親父はいう。ねじれた髪をして、ゆつくりと噛み煙草を歯ぐきにおしこみながら、向うを眺めやつてゐる。

「さあ、行こう」ジュエルはいつて、階段をおりてゆく。ヴァーノンはごみの上にうまく唾を吐き出す。

「じゃ、晩方までじゃな」親父はいう。「アディを待たせとうないんじや」

ジュエルはちらりと見返してから、家の角を曲つて行つてしまふ。俺が広間に入ると、戸口にまで行かぬうちに、人の声が聞えてくる。斜面沿いに傾いているうちとおんなじに、丘から斜めにふき下ろしてきた風が、こんどは上向きにしょつちゅう広間を吹き抜けている。玄関に羽を落とす、舞い上つて、天井をかすめながら奥のほうへ飛んでいつて、結局、裏口の下向き

の風の流れに行き当ることになる。人の声だつて、そのとおり。広間に入ると、頭の上の空中で話しているみたいにひびくんだ。

コーラ

何ともうるわしいことじゃった。これでもう二度と、お袋さんには会えん、親父のアンスの言いつけで、実の母親の死の床から追いたてられて、二度とこの世じゃ会えなくなると判つてみると、私あいつもいうとつた。母親の性質を受けついで、生れつき優しい気持を持つてゐるのは、あの子だけだ、といつもいうとつた。ジュエルのはうはまるで違ふ、アデイがあればど苦労して生んで、大事に大事に可愛がつて育てたあの子が、むやみに腹を立てたり、ふくれつ面をしたり、手ひどい悪戯をやらかして母親をあんまり痛めつけるんで、時々はこのちがひつぱたいでやつたもんじゃった。母親にお別れをいいに戻ってくるような男じゃない。三ドル余分にもかかる機会とあれば、母親の最後の接吻も平気で見送つてしまふ男じゃ。誰一人愛しもせず、できるだけ手間をかけずに何かを手に入れる以外は念頭にもないという、ただもう根つからのバンドレン家の人間じゃ。うちの人の話じゃ、

ダールがみんなに待つてくれと頼んだ。ダールは膝をついて頼まんばかりじゃった、あんな重病のお袋をほうつて出かけさせんでくれって。が、アンスとジュエルは、三ドルの儲けとなりや、何がどういったつて、きくもんじやない。

アンスのはうは、あんな男じゃからさもありなん話だが、あのジュエルが、母親の長年の猥身と格別に可愛がつてもらつた恩をほうりすてて——いや、そんな噂にやあ、だまされん。バンドレンのお上さんはジュエルが一番きらいじゃつたと、うちの人はいつてゐるが、いや、そんなことはないね。ジュエルを格別ひいきしてつてことは、私にはよう判つとる——お上さんが、アンスみたいな、うちの人が毒でも飲ましてやりやいいといつたあのアンスみたいな男に長年辛抱してきたとおんなじ性質がジュエルにも伝わつていて、そいつが氣にいつていた——それが、たかが三ドルのことで、死の床の母親に最後の接吻もさせてやらんなんて。

ここ三週間というものは、私あ、折を見つては、この家によつてきて、自分のうちの家族や仕事までほつたらかして、時には来ちゃいかん時にまで出かけてきたというのも、せめて最後の時だけは誰かが傍にいてやれるように、死神と顔を合わせるのに、見知りの顔が一つもなくしては元氣も出まいと思つてのことじゃ。いや、何も格別賞めてもらおうというつもりじゃない。ただ自分の時にもおんなじことがしてもらいただけじゃ。が、ありがたいことに、私あ、血

のつながる肉親の顔をおがみながら、死ねるじやろう。夫や子供に、私ぐらい恵まれとる女も少ないんじや。もつと、時にはつらい目にも会わされたもんじやが。

バンドレンのお上さんは、一人ぼっちじゃつた。一人ぼっちで誇り高く、辛いことばかりだつていうのを隠して、世間の人間には違つたふうに見えるやうとしてきた。いつたい、棺桶に入つてからだも冷たくならんうちから、車にのせて四十マイルも先に埋めに出かけるなんて——神の御意志もないがしろにしとる。バンドレン家の者と同じ土地に埋めてもやらんなんて。「でも、お上さんが自分でいい出したんだぞ。自分の一族のあいだに埋めてほしいといふのは、お上さんの望みじや」つてうちの人は、いつた。

「じゃ、どうして生きてるうちに行かなんだんですかい？ 誰一人止める者なんかあるまいに、末っ子の小僧まで大きくなつて、ちゃんとほかの兄弟なみに身勝手、無情になつちまつた、というのに」私はいつた。

「お上さんの望みなんじや」うちの人はいつた。「わしはアンスの口からきいたよ」

「で、アンスのいうとおりだつて、おつしやる。あんたさんみたくは、そうかもしれんが、誰がそんなたわけた話を」

「アンスの話だつて、時には信用してやるさ。いわんでおいてもこつちから何かまき上げる、あでもないような話の場合は、な」

「たわけた話ですよ」私はいった。「女の座は、生きても死んでも、亭主と子供のところ以外ありませんよ。いざ私の順番がきた時に、あんたや娘たちから離れて、アラバマまで戻ってゆくってわけですかい？ 自分の意志で、どんなことになろうと、この世もあの世も、もろとも引いて出て来た私がね？」

「そりゃあ、人それぞれさ」

そうあってほしいもんですよ。これまで神と人間の眼の前で正しく、夫の名誉と安楽のために、また子供の愛を尊敬にふさわしいように暮らそうとやってきました。そこで、自分の務めとその報酬に心安んじて最後の床につく時は、愛してくる者たちの顔にかこまれ、いとしき者それぞれのお別れの接吻を受けられる。アディ・バンドレンみたいに、誇りと傷心をおし隠して、一人ぼっちで死んでゆくのは、まるで違う。

あの人は、死んでゆくのを喜んだ。キャッシュがお棺を作っているのが見えているように、頭を起してもらった。キャッシュが手を抜かのように、見張ってなくちゃならんのじゃ。まったくあの連中ときたら、雨になって、河があふれて渡れなくなる前に、もう三ドル稼いでおこうってことしか頭になんじやから。あの最後の荷物を運ぶことにきめなかつたら、きっとアディを蒲団ごと車につみこんで、まず河を渡っておいてから、その後でゆっくり死んでもらう、なんてこともやりかねん連中じゃ。

ダールだけは別。何ともうるわしいもんじゃ

った。時には私も人間ってものが信用できなくなる、疑いにさいなまれる。が、いつでも主が信仰をとり戻してくださって、神の作り給うた者たちに対する豊かな愛をあかしてくださる。

だが、ジュエルはいかん。アディがいつもあんなに可愛がってきたのに、あの子はいかん。余分の三ドルを追っかけまわすくちじやった。ダールだけじゃ。世間の人が変人で怠け者で、アンス同様にぶらぶらしているとくさずダールだけじゃ。キャッシュは腕のいい大工だが、廻りきれんぐらいの仕事を引き受けるし、ジュエルときたら、いつでも金になるか評判になるかすることしからやらんし、娘は裸同然の恰好で、いつもうちわをもってアディのそばに番をして、アディに話しかけたり、慰めようとする人間がくるたびに、さっそく代りに返事をしてしまつて、まるで誰も近づけまいとしているみたいじゃ。

ダールだけじゃ。戸口にきて、じつと立ったまま、死も近い母親を見まもつてた。ただ見とただけじゃが、私には、主の豊かな愛と慈悲がまた感じられてきたんじや。私にやあ判ってあなたが、ジュエルに向つては、アディも上べだけのことなんで、本当の愛と理解がよかつてるのは、ダールのとあいだだけなんじや。ただじつと見ていただけじやった。アディから見るところまで入ってきませんで。しかし、なまじ顔を見れば、アンスの言いつけで追いやられて、もう二度と顔が見れんのだと判って、アディも動転するだけのこと。ダールは一言もいわ

ず、ただ見とるだけじやった。

「何か用、ダール？」って、デューイ・デルがうちわも止めずに、さつと口を出して、ダールまでも近づけまいとした。ダールは返事しなかつた。つづ立ったまま、ただ死も近い母親をじつと見ておった。胸がいつばいで、言葉も出んかつたんじや。

デューイ・デル

あたいとレーフが初めて、棉つみをやった時のこと。お父は、汗かくと病気で死んじまうからって、働きもせずに、皆の衆が手伝いにきてくれる。ジュエルは、何一つ気にもかけん、身内じやないみたいに、気にもせん。キャッシュときたら、好きなのは、長い暑い悲しい黄色い日々も、ただ板にひいちゃ、何かに釘で打ちつけることばかり。で、お父は、いつでも近所の人間はあんなふうに助け合うものときめこんでる。なにもかも近所まかせで、探り出す(彼女)の暇もありませんのじやから。ダールだって、嗅ぎ出すわけがないとばかり思つてた。食事のテーブルに坐つても、食い物もランプも眼に入らんぐらいぼうつとして、自分の頭の中から掘り出した土地と、その向うの遠い、遠い穴でいつばいなんだから。

あたいたち、棉畑を摘んでゆくと、森が、秘密の木蔭がだんだん近づいてきて、あたいの袋とレーフの袋で摘みながら、秘密の木蔭に入っていた。袋が半分つまつた時、あたい、どうしようかつていったんで、森に行き着いても、あたいのほうは袋にいっぱいとはゆかないわとあったんで。あたいはいったわ、あれをしちやいかんもんなら袋はいっぱいにはならんし、次の畑に移つてゆくんじゃけど、袋がいっぱいになつたら、あたい、どうにもならないわつてしよっちゅう、やらずにいられなくなるつて、あたい、どうにもならなくなるわつて。で、あたいたち、ずつと秘密の木蔭まで摘んでいつて、あたいたちの眼が、お互の手にぶつかると、いっしょにもつれ合つて、そして、あたいは何にもいわなかつた。「あんた、何してるの」つてあたいがいうと、「お前の袋に摘んでやつてるのさ」つて、レーフがいった。で、畑の端までくると、袋がいっぱいになつたんで、あたい、どうにもならなかつたんよ。

そういうわけで、どうにもならなかつたんよ。あん時よ、あん時、あたいがダールの顔を見ると、ダールに判つちやつたの。口に出さないで、判つたつていうたんよ、ちょうど母ちゃんが死ぬつて、口に出さないで、ダールが教えてくれた時みたいに。口に出して「判つたぞ」といったんなら、ダールがあつた場に米合わせて、あたいたちを見たなんて信用しやしないんだけど。でも、ダールはほんとに判つた、といったんよ。

で、あたいが「父ちゃんにいつける？」レーフを殺しちゃうつもり？」つて、口に出さないできいたら、ダールも「どうして」つて口に出さないでいったわ。それで、ダールには、ちゃんと判つてんだから、判つて、憎い気持ちをこめて話ができるの。

ダールが入口に立つて、母ちゃんを見ている。「何か用、ダール」つて、あたいがいう。「母ちゃんは死ぬな」つてダールがいう。はげ、わし婆のタル公が、死ぬところ見ようつてやつてくだけど、あんな連中、ちよろまかすぐらい、わけないわ。

「母ちゃん、いつ死ぬの？」つて、あたいがいう。

「俺たちが戻らんうちに」ダールがいう。

「じゃ、なぜジュエル連れてくの」

「荷物積みの手伝いさせるんだ」ダールがいう。

タル

アンスは膝をこすり続けとる。奴^{やつこ}さんの上っ張り、はげちよろけだ。片つぽうの膝には、よそ行き用の、アイロンかけて、びんとしたズボンから切りとつたサージの継ぎがあたつとる。「そんなこと、俺あ、大きれえさ」奴がいう。

「時には、前もつて考えとかなくつちゃ、なら

んわさ」俺がいう。「が、とどのつまり、どつちにも何の損にもならねえぜ」

「アディのほうじゃ、すぐにも発^はつてほしいだらうぜ。それに、ジェファアンセンじゃ道のりもたふぶりだ」奴がいう。

「だが、今なら道は良いし」俺はいう。それに、今晩は雨になりそうだ。奴の一家の墓は三マイルと離れていないニュー・ホープにある。それなのに、馬で一日たつぶりかかるところの女と結婚して、死んだ後まで手がかるなんて、奴さんらしい話だ。

アンスは、膝をこすりながら、遠方を眺めている。「そんなことは、ご免だね」奴はいう。

「ゆっくり間に合うさ」俺はいう。「俺なら心配はせんな」

「何しろ、三ドルの儲けじゃ」彼はいう。

「ひよつとしたら、あわてて戻る必要は全然ないかもしれんて」俺はいう。「そうゆきやあいが」

「アディは死にかけとる」奴はいう。「もう覚悟を決めとるんでな」女に辛い生涯だ、まったく。ある女たちには。うちのお袋が七十幾つまで生きてたことを思い出す。毎日、晴雨おかまいなしで働いた。最後の子供が生まれるまで一日だつて病氣したこともなかつた。で、ある日、いわばひよつと氣がついたみたいにあたりを見まわして、四十五年前に買つて、一度も簞笥^{たんす}から出したこともないレースの縁飾りのついた寝巻を取りにいつて、着こんで、寝台に横になつ

て、上掛けを引っぱり上げて、眼をつむった。「これからは、お前さんがたみんなで父ちゃんを見て上げておくれ」お袋はいった。「私あ、くたびれた」

アンスは膝の上で手をこすってる。「主は与え給う」そういった。角の向うからはキャッシュが金づちや鋸を使ってる音がきこえてくる。そのとおり。アンスがこれほどほんとうのことを口にしたことはない。「主は与え給う」俺はいった。

あの子が丘を上ってくる。自分の背丈^{せたい}ほどもありそうな魚を持っている。それを地面に投げすて、「はあ」と唸^{おとな}って、大人^{おとな}みたいに肩ごしに唾を吐く。まったく、奴さんの背丈はともありそうなやつだ。

「何だい？」俺はいう。「すずきかな。どこでつかまえたんだ？」

「橋のとこだよ」そういうながら、魚を引っくり返すと、下側の、湿ってるところに泥がいっぱいこびりつき、眼も泥^{どろ}で、泥の下でこぶみたいに突き出てる。

「そこにほっとくつもりかい？」アンスがいう。「母ちゃんに見せたいんだ」ヴァーダマンはそういって、窓のほうを見る。流れ出る通風に乘って、話し声が聞えてくる。板をこつこつ、とんとん叩いてるキャッシュの音も。「だいぶ人があるな」あの子はいう。

「俺んこの者だけさ」俺はいう。「連中もきつと面白がるぜ」

あの子は戸のほうを見つめたまま、何ともいわない。それから泥の中に横たわっている魚を見下ろしている。足で魚をひっくり返し、突き出した眼を足の指でつついて、えぐり出そうとする。アンスは遠方を見やつてる。ヴァーダマンはアンスの顔を見、それから戸口を見る。向き直って、家の角のほうへ歩きかけると、アンスはふり向きもせず呼びかける。

「魚を片づけてゆきな」アンスはいう。

ヴァーダマンは立ち止まる。「姉ちゃんにやらせりや、いいじゃないか」という。

「お前がやるんだ」とアンス。

「そんな、父ちゃん」

「お前がやりな」アンスはいう。彼は振り向かない。ヴァーダマンは戻ってきて、魚を拾い上げる。魚は湿った泥をはねかけながら、するりと奴の手から脱け出して、どきりと落ち、また泥まみれになりながら、口を開き、眼をぎよろつかせて、死ぬのを恥ずかしがりでもするようになり、また急いでまた隠れ直したいとでもいうふうに泥の中に身を隠す。ヴァーダマンはちくしようにめ！という。魚をまたいで立ちながら、大人なみに罵ってみせる。アンスは振り向かない。ヴァーダマンはまた魚を拾い上げる。魚を薪みたいに両腕にかかえてこんで家の角をまわってゆく。魚とあの子と、頭と尾の両はじが重なり合ってる。あの子に負けんくらいに、でかい魚だ。

アンスの両手首は袖口からぶらんと垂れてい

る。今までアンスが、ほんとうに自分のシャツらしいのを着てるのは見たためしがない。どれもこれも、ジュエルのお古をもらい受けたような恰好だった。だが、ジュエルとは違う。奴さんはひよろ長いにせよ、腕が長い。それに汗をかぬということがある。その点で、間違いないアンスのシャツだと判るはずだ。奴の眼は燃え切った焼けがらを顔にくつつけたみたいで、遠くを眺めわたしている。

影が階段にふれると、「もう五時だぞ」とアンスがいう。

ちょうど俺が立とうとしてるところへ、コーラが戸口へやつてきて、もう帰る時間だという。アンスは靴のほうへ手をのばす。「バンドレンさん、あんたはお立ちになることないで」コーラがいう。アンスは踏みつけるようにして靴をはく。奴は何をやる時でもしよつちゅう、ほんとうはやれんほうがいい、やらずにすめばいいといったふうに見える。いっしょに広間に行く途中、アンスの靴は床にどしんどしんぶつかって、まるで鉄の靴みだ。アンスは妻のいる部屋の戸口まできて、いわば自分の眼で見る前に、思い描いてみるといったふうに、アディが起き上って、椅子に坐っているか、それと掃除をしてはせぬかと望みでもするように、目ばたきしてから、びっくりした眼付で、部屋をのぞきこむ。アディが相変らず寢床にいて、デューイ・デルも相変らずうちわであおいでるので、びっくりしたといった顔付だ。二度と